博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　宮崎恒二

学位申請者　塩谷もも

論　文　名　ジャワにおける共同体と儀礼　－女性の役割と儀礼変化を中心に－

【審査の結果】

2010年3月31日、宮崎恒二（主査）、栗田博之、三尾裕子、西井凉子、染谷臣道からなる審査委員会により、上記論文の審査ならびに最終試験を実施し、標記論文を合格と判断するとともに、最終試験を合格とした。

本論文は、長期間のフィールドワークにおいて収集した詳細なデータにもとづく、儀礼における女性の役割と社会関係に焦点を合わせた研究である。儀礼の執行場面を主対象としてきた従来の研究から、儀礼における料理の分配や準備作業における女性の役割へとシフトしてきた近年の研究を踏まえ、儀礼の要素の変遷や労力交換の様態の変化から、急激に変動するジャワ社会において、料理の贈与交換と料理に関わる労力交換が共同体意識の維持・生成の役割を果たしていることを明らかにしたものである。

審査委員会では、先行研究の概観、現地に密着したフィールドワークによる資料収集、そして複雑化する現代ジャワ社会に関する新鮮な分析を備えていることから、本論文は、課程博士の水準を満たすものであると判断された。論文の審査ならびに最終試験の結果、全員一致で申請者に対し、博士（学術）の学位を授与するのがふさわしいとの結論を得た。

【論文の概要】

本学位論文は序章を含む七つの章からなる。

序章では、ジャワにおける共同体に関する先行研究が概観され、ジャワにおける集団としての共同体の存在を肯定する立場では、ジャワの農村の慣習法に見られた土地への規制を根拠にしたこと、他方、否定する立場では、ジャワ社会の基本的な原理を集団にではなく、二者関係に求めてきたと指摘されている。またジャワの儀礼に関する先行研究を取り上げ、儀礼の参加・主催をめぐる互酬性と平等原理、儀礼における女性の関与に的を絞った概観が成されており、料理という行為についての研究の欠落が指摘されている。

第1章「調査地概要」では、調査地の住民構成、歴史、宗教、言語行動などに関する概観ののち、地縁に基づく社会関係として分析の対象となる町内会や隣組などの住民組織、それらを基盤とする女性の活動状況、モスクを基盤とする活動を取り上げ、共同体意識の形成・維持に関する考察の背景となる情報を提供している。

第2章「年中行事の変化：イスラームの影響と年中行事の簡略化」では、ジャワにおけ

るイスラーム意識の高まりにより、従来執り行われてきた儀礼について、土地に宿る精霊や祖先への供物など、非イスラーム的と判断される要素の排除ないし置き換えが進んでおり、儀礼の際に用意される料理についても、その意味が忘却されたり、異なる解釈が行われるようになっていることが述べられている。とりわけ、この傾向は、世帯単位でなく地域単位で行われる儀礼に顕著であり、断食明けの行事に関して、中東への留学経験者の意見にもとづき、従来の儀礼の要素の変更が見られる。この章では、断食前に行われていた祖先への儀礼であるサドラナンに焦点を合わせ、用意される料理の変化や、それについてのイスラームの教えに基づく講話、そして、イスラーム意識の高まりの主たる担い手としての女性の関与の増大が報告されている。また、儀礼の簡略化を求める動きや、イスラームを強調するマクロな動きに加え、イスラームの教師を務めているある新住民の影響など、ミクロな動きが絡み合う中、それらを超えた共同体意識の維持のため、儀礼が継続されている状況が報告されている。

第３章「人生儀礼の変化：イスラーム意識の高まりと人生儀礼の簡略化」では、人生儀礼（誕生儀礼、婚姻儀礼、死後儀礼）が取り上げられ、調査で収集した事例の分析から、世帯単位で行われるこれらの儀礼においては女性の影響力が強いこと、また年中行事同様、イスラーム意識の高まりと儀礼の簡略化という流れの中で、宗教講話会を通じて、女性が変化の主導権を握ることが指摘されている。

第４章「儀礼における相互扶助と隣人意識」は、共同体意識の基盤となる相互扶助と隣人関係に関する記述である。男性が行政区分にもとづく地域全体の活動を担うのに対し、女性が世帯単位での活動を担うこと、とりわけ儀礼の料理準備に際しての労力交換であるレワンを通じて、女性が夫の社会的な評価を支えていること、またレワンの場で独自の社会的な序列が生成されることが指摘されている。また、各々の場で用いられる言語のスタイル、すなわち、男性による活動の場面においては、内容よりも形式が重んじられる敬語が用いられるのに対し、女性による活動の場においては、逆に常体が用いられ、内容が重要となるゴシップが繰り広げられる。

第５章「レワンで維持される隣人関係」では、レワンに関する事例の詳細な記述を行ったのち、実際に贈与される料理の内容が、主催者との関係により差異化されることを指摘している。この差異化は、儀礼の「表」において強調される平等の原理と反するものであり、この差異が公然と開示されることはないが、贈られる人物の社会的地位や行政組織の役職者、年長者、あるいは個人的に親しい関係などが優遇される。また、このような明示されない差異化が露見した際、人々の間に軋轢が生じることが、報告されている。

第６章「ケータリングに対するレワンの反発」では、料理準備の共同作業にとって変わりつつあるケータリングの利用による料理の贈与交換に目を向け、効率化を重んじてケータリングの導入することについては、それがレワンの互助関係を衰退させるため、否定的にとらえられること、そして、隣人関係に、対称性（＝平等性）を強調するレワンの原理と、ケータリングに伴う非対称的な関係が重なる状況で、関係の崩壊が発生した例が取り上げられている。

終章では、第１章から第６章までの事例の提示と分析をもとに、儀礼に関しては、儀礼の場よりも、その準備への参加やその場における行為がより社会関係に影響を及ぼしていること、後者の互酬性の輪がほぼ近隣の空間に限定され、それが共同体意識を支える上で、大きな役割を果たしていること、そして、新住民などの増加により、労力交換が敬遠されつつある中、ケータリングを利用した料理の交換により、共同体意識の維持ないし形成を図っていることが、結論として述べられている。

【論文の評価と審査の概要】

本論文は儀礼を主たる研究対象としてとらえるに当たり、先行研究の多くが注目してきた、当事者の定義による「儀礼」自体の場における行為ではなく、その準備作業の組織や実際の作業の空間をも含んだ対象としてとらえたことに最大の特徴がある。儀礼をその周辺の活動をも含め、とらえるべきであるとする先行研究も見られないわけではないが、本論文は、長期にわたる調査により、多くの事例に関するデータを収集し、その分析により、この観点の有効性を示したことが高く評価される。

また、このように対象を狭義の「儀礼」ではなく、その周辺的な活動をも含む現象まで含めて観察することにより、一方では、ジャワ社会において少なくとも半世紀以上にわたる通奏低音ともいえる、「イスラーム」の強調による従来の儀礼や信仰の否定ないし再解釈の流れを再確認すると共に、この流れが、社会関係の維持・形成にも作用していること、他方では、贈与交換が形を変えつつ、やはり社会関係の維持・形成の重要な要因で有り続けていることを明らかにしたことは評価される。

加えて、儀礼の「表」の部分で強調される平等性や調和といった規範が、儀礼準備の作業とその変化の過程で、大きく崩れつつある状況を見いだしたことは、急激な変化を遂げつつある社会と伝統的な慣行との関係を考察する今後の研究の方向性を示すものとして注目される。

他方、本論文の表題に現れる「共同体」という概念を、あまりにも実態として平板にとらえているのではないか、という点が指摘される。様々な立場からの数多くの議論を考慮するならば、この概念の使用にはより慎重な配慮が必要であり、「共同体」ではなく、重層的ないし並立的な「共同体意識」という概念で用いる方が望ましいと思われる。

また、当事者の語りに依拠するあまり、しばしば規範とは相容れない、行動面からのみ観察可能な「原理」を見いだそうとしていないことに、やや不満が残る。儀礼の「表」の場面における平等性の強調も、実際の座順に着目すれば、言と行における異質な規範が見いだせたのではないか、という指摘も質疑の過程でなされた。この点に関連し、社会的地位やパトロン-クライアント関係など、明らかに存在すると考えられる不平等性についての言及が少ない点も指摘された。

これらの疑問に対し、申請者からは、観察による限り、地理的な近接関係と行政区分が、ほぼ儀礼に関わる社会関係の境界をなし、かならずしも明確ではないがこのような範囲の存在に着目した、との説明があった。また、「表」の場面の事例や、上下関係については、

調査の対象を「裏」における労働の組織や業務の分担、会話の内容などに集中させたため、やや不十分であったとの認識が示された。

全般的に、豊富なデータを博士論文における分析にすべて活かし切っている訳ではない点も惜しまれる。

本論文の審査ならびに最終試験における質疑応答の結果、審査委員会は、次のような結論に達した。

非常に変化の激しい都市近郊の村落を対象にした綿密なフィールドワークに基づいて、詳細なデータを収集、提示していることは、高く評価される。詳細な記述は、今後の申請者本人及び他の研究者にとって、貴重な資料となりうる。

儀礼を社会関係に注目して観察する過程で、これまでの「表」の場面での宗教的な行為ではなく、「裏」で繰り広げられる料理と労力の交換という大きなサイクルの重要性に着目し、その互酬性の中に共同体の存在を確認したことは、大いに注目される。地域の旧住民とは異なる志向性を有する新住民の間でも、また旧住民と新住民の間でも、料理の交換によって共同体が維持あるいは形成されることを明らかにしたことは、あらたな発見として評価される。今後、より大きな議論への発展性が期待される。

提出された論文およびそれに対する口頭試問により、以上のような評価を審査委員が共有するに至り、博士学位を授与するに足る論文と認めた。